

# 化石館だより



## コラム

### ホタテガイの祖先

ホタテガイと言えば、大きな貝柱を食する東北・北海道地方特産の貝が思い浮かびます。また一方では、石油会社の看板や、ポッティチェリの名画「ビーナス誕生」をイメージされる方がおられるかもしれませんが、こちらはホタテガイの仲間ではあっても別種のイタヤガイがモデルになっているようです。ホタテガイとイタヤガイはよく似た形をしていますが、放射肋とよぶ放射状に伸びる筋の数が、ホタテガイの場合は約20本、イタヤガイは約10本と異なります。また、一本一本の筋を見ると、ホタテガイでは丸みを帯びているのに対して、イタヤガイでは幅広く扁平になっています。

ホタテガイとイタヤガイ、これらの貝は共に「イタヤガイ科 (*Pectinidae*)」に属する二枚貝です。一般の方々にはホタテガイの方がなじみ深いのですが、このグループの代表はイタヤガイとなっています。イタヤガイの属名はペクテン (*Pecten*) といいますので、ホタテガイの仲間のことをペクテン類ともよびます。貝化石の中でもペクテン類は比較的きれいに保存されていることが多く形も良いので、化石好きな方は、ペクテンという名前をよくご存じだと思います。

イタヤガイ科の貝類が繁栄するのは、中生代に入ってからですが、古生代にもアビキュロペクテン科 (*Aviculopectinidae*) をはじめとするホタテガイによく似た形をした貝類がいました。アビキュロペクテンは、かつてホタテガイ類の祖先と考えられていましたが、靱帯の構造が異なることから別グループとして扱われています。現在では、ホタテガイ類の祖先は石炭紀からペルム紀に生息したペルノペクテン (*Pernopecten*) の仲間であろうと考えられています。

金生山では、早坂一郎 (1925) によって *Aviculopecten minoensis* 及び *Aviculopecten reticularis* というホタテガイ類の化石が記載されています。しかし、アビキュロペクテンとは殻のふくらみや放射肋の様子が異なることから Nakazawa and Newell (1968) により、ハヤサカペクテン (*Hayasakapecten*) という新属が設けられここに移されました。さらに、山田敏弘 (1995) は *minoensis* と *reticularis* の違いは単なる成長過程の違いに過ぎないと考え、両者を *minoensis* に統一しました。





金生山ではホタテガイ類の化石がもう1種見つかっています。それはペルノペクテンの仲間で、中澤圭二によって *Pernopecten terukoae* と名付けられた貝です。この貝は円形をした大型の貝で、10 cm程度になります。殻の表面は放射肋が目立たずのっぺりしています。また耳の部分は左右の殻で異なり、左殻では上に突き出したようになっています。ペルノペクテンは先に述べたようにホタテガイ類の祖先と考えられている貝です。

ホタテガイ類の貝には、足糸という糸状の繊維で岩などに固着して生活するものと、砂底で自由生活をするものが知られています。食用のホタテガイは、自由生活型の貝で、ヒトデなどの天敵に襲われると二つの殻をパクパクさせて強い水流を噴射し、泳いで逃げることが知られています。強い水流を噴射するには殻頂角が大きいほうが有利です。金生山で見ついているハヤサカペクテンは、殻が縦長で殻頂角が小さいことから固着生活をしていたようです。一方のペルノペクテンは円形をしていて殻頂角が大きいことから遊泳することができたと考えられています。

(文責：高木洋一)

\*\*\*\*\*

## お知らせ

前期企画展

### 「巨大二枚貝シカマイア」

～ 金生山の二枚貝化石たち ～

開催中!

金生山で発見された殻長1mを超える巨大な二枚貝シカマイアは古生代最大の二枚貝と言われています。その模式種であるシカマイア・アカサカエンシスの復元模型と多くの実物標本、また金生山から発見された全種類の二枚貝化石を展示しています。

期間： 5月3日(水)～9月11日(月)

入館料： 一般100円 高校生以下無料

開館： 火曜日・祝日の翌日



問い合わせ： 大垣市金生山化石館 電話 (0584) 71-0950 (ファックスも同じ)

Email [kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp](mailto:kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp)